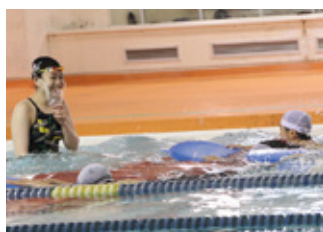




今年度からスタートした第6次小田原市総合計画。本市が目指す、2030年の姿「世界が憧れるまち“小田原”」の実現に向けまちが育っていく-GROW-ようすをお伝えする、広報小田原特別編「GROW」。7つの重点施策を年4回に分けて特集します。



7つの重点施策

1. 医療・福祉
2. 防災・減災
3. 教育・子育て
4. 地域経済
5. 歴史・文化
6. 環境・エネルギー
7. まちづくり



「防災・減災」「教育・子育て」

— 災害に強いまち、子どもが夢や希望をもって成長できるまちに —

「防災・減災」分野では「市民に漏らさず情報提供ができる」防災のデジタル化の取り組みを紹介。「教育・子育て」分野では子どもたちが「将来の夢や郷土に対する誇りを持てるように」「より良い社会を創る力と心を身につけて成長できるように」、質の高い教育環境を目指す取り組みをお知らせします。

| 2-3 | 進化する小田原の非常時情報伝達手段

| 4-5 | 質の高い学びの実現を目指して

| 6-7 | 個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けて

| 8 | 幼児教育・保育の質の向上

GROW

広報小田原特別編

2/4
AUTUMN

逃げ遅れゼロを実現する 進化する小田原の非常時情報伝達手段

1980年代

災害情報を迅速かつ的確に伝達できるよう、市では昭和59・60年度(1984・1985年度)にアナログ波の防災行政無線を整備し、昭和61年(1986年)1月に市内全域で運用を開始しました。当時は、この無線が緊急時に市から情報を伝える唯一の手段でした。



防災行政無線

現在

防災行政無線は屋外放送という性質上、家の中などで全ての言葉を鮮明に聞き取ることができません。現在は、防災メールなどデジタルによる情報配信も行っています。デジタル化の進歩などにより情報伝達手段が多様化する中、「非常時通信システム基本計画」を策定。災害時の情報伝達手段を全体的に見直していきます。

場所や天候により、よく聞きとれない場合が……

防災行政無線



さまざまな手段で情報が得られる!



市ホームページ

防災メール



F M ODAWARA 87.9MHz

FMおだわら



戸別受信機

その他の
災害情報の
取得方法▶



新たな災害情報発信に 取り組んでいます!

令和4年度、従来の戸別受信機の代替として、我々自治会長に防災タブレットが配られると聞いており、時代に即して情報伝達手段も変化していると感じています。併せて導入される防災アプリは、住民の皆さんがスマホなどで詳しい情報をいち早く得る手段となるため、有効活用されることを願っています。

一方でデジタルによる情報伝達が強化されても、機能に応じて防災行政無線を残す必要はあると考えます。災害時に必ずしも、スマホなどを手にしていないこともあり、非常時であることを伝えるサイレンとしては担うべき役目があるからです。伝達手段は変わっていきますが、「命を守る」という目的は不変。逃げ遅れが発生しない環境が整備されることを望みます。



小田原市自治会総連合
会長
川口博三さん

訓練も重要!!

地域の特性に応じた

いっせいで総合防災訓練

10/23
(日)

大規模な地震が発生した際、地域の特性に応じて適切に対応できるよう、各地域の自主防災組織や防災関係機関と連携した防災訓練を行います。

訓練例



▲給水訓練



▲仮設トイレ設置訓練

昭和の頃、災害時の情報伝達の中心となっていた「防災行政無線」は、現在、更新の時期を迎えています。一方、デジタル化の進化により、スマートフォンなどを利用して瞬時に多くの人の手元に情報を伝えることができるなど、情報伝達手段は多様化しています。市では、「災害時に適切な情報が多様な手段により全ての人に届く」ように体制を整えていきます。

～2028年

デジタル技術をさらに活用することで防災に関する情報発信・共有をより効率的に行う他、災害発生時には情報を個人の手元に直接届けられる体制を確立します。

屋外

- 地震情報(緊急地震速報)
- 津波情報(津波警報など)



防災行政無線
(津波災害警戒区域などへ)
再配置

広報車



場所に応じて

伝えるべき情報が伝えるべき人に
確実に伝わる体制



NEW

防災アプリや
防災メールの他、
SNS・エアメールなど
スマートフォンによる情報伝達



NEW

防災タブレット



市ホームページ



FM ODAWARA 87.9MHz

FMおだわら

屋内

- 地震情報 ■ 津波情報
- 風水害情報(洪水予報など)



テレビ



J:COM端末



電話・FAX



一人一人がいち早く自発的に情報を得るため
防災アプリ※や防災メールの登録を!

※防災アプリは2023年2月に運用開始予定です。詳しくは、市ホームページなどでお知らせします。

防災・減災を研究する
先生に伺いました!



立教大学大学院
21世紀社会デザイン研究科
社会学部 メディア社会学科
としなり
長坂俊成 教授

これからの防災に大事なことは?

小田原には豊かな自然があります。しかし、それは同時に、津波や土砂災害など、地域固有のリスクでもあります。このような認識が、防災への第一歩となります。

災害情報を伝える手段として、今やデジタルが主流となっていますが、災害は一刻を争い、なおかつ状況に応じて対応が異なるため、どの手段が有効であるとは一概には言えません。最も大切なことは、適時・的確に避難できるかどうか。最適な避難につながる手段を平時のうちから想定しておき、判断の決め手となる情報をいち早く手に入れることが、「命を守る」ことにつながります。

国の方針に「自らの命は自らが守る」というものがあります。これを「自助」といい、近隣の方々と助け合うことを「共助」といいます。地域固有のリスクに対応する自助・共助とは何か、常日頃から考えておくことも防災・減災には必要です。



小田原が考える、教育のカタチとは？

質の高い学びの実現を目指して

高度化した先端技術の導入などにより、社会は劇的に変わりつつあります。こうした中、おだわらっ子がさまざまな人たちとの関わりを通して、この先必要となる、よりよい社会を創る力と心(社会力)を身に付け成長できるように、質の高い教育環境の提供を目指しています。

おだわらっ

未来を創るた

「のび」に注目

ステップアップ調査

一人一人が「どれだけ成長できているか」を把握する調査を実施しています。

詳しくは、P.7をチェック！

豊かな心

自らを律しつつ他者と協調し、人を思いやる心や感動する心などを育みます。

体験で育む

農業体験

少しずつ成長する農作物と向き合いながら、命の尊さや農作物を生産することの大変さについて、体験的に学習しています。

学ぶ力

これからの時代に必要となる資質・能力をバランスよく育みます。

郷土の偉人から学ぶ

尊徳学習

郷土の歴史や文化に触れ、理解し、愛する心を育てるため、二宮尊徳翁について学習しています。

グローバル化に向けて

ALTの配置

世界の多様な文化理解とコミュニケーション能力を育成するため、ネイティブスピーカー(英語圏出身)の外国語指導助手(ALT)を配置しています。

社会力^{*}の育成

※子ども一人一人が自分を輝かせて充実した人生を送ることで、よりよい地域社会を創る力

学校

目標は、「学びがたくさんある遊び」

幼児期は、子ども自ら「やりたい」と思ったことに取り組む中で、頭も心も体も動かして、さまざまな対象に直接関わりながら学んでいきます。「もっと楽しくしたい!」「どうしたらできるかな?」など自分なりに考えを巡らし、想像力を発揮し、自分の体を使ったり、また、友達と共有したり協力したりして、遊びを創り上げていく中にたくさんの学びがあります。



幼児教育・保育の質の向上を目指し、

詳しくは、P.8をチェック！

子の目指す姿

くましい子ども

地域と関わる

地域での活動

海岸に近い小学校では「ウミガメが来る浜作り」を目指して海岸清掃を、国道1号に近い学校では「箱根駅伝を支える活動」として実施前後の清掃活動を行っています。

社会と関わる

生徒による小田原城ガイド

中学生が総合的な学習の時間で調べた小田原の歴史について、ボランティアガイドとして小田原城を訪ねた観光客に案内をしています。

関わる力

人やものなどとさまざまな関わりを持つことで、自分を高めていくことを大切にします。

「社会力」を育むために、「個別最適^①の学び」と「協働的^②の学び」が求められています。

“本物”をきっかけに

アスリート派遣

運動に興味を持ち、積極的に取り組むきっかけとするため、オリンピックやパラリンピアンなど著名なアスリートが講話や実技指導などを行っています。

健やかな体

生涯を通じて運動やスポーツに取り組む資質や能力、健康で安全な生活を送るための知識や態度を育みます。

真剣勝負を体験する

特別支援学級のボッチャ競技大会

中学校体育連盟の大会として、近隣の中学校特別支援学級在籍生徒が一堂に集まり、ボッチャ競技を通して交流を深めています。全国的にも先進的な活動です。

議会と関わる

議会見学

議会の仕組みや役割を学び、政治的教養を育むため、市議会の議場見学などの体験を行っています。

教育

小学校への円滑なつながりを推進

幼児期から学童期へ、発達と学びはつながっていきます。

幼児期の教育と小学校教育。学び方は違っても、学ぶ姿勢は同じです。幼児期は、子どもが発信し展開していく遊びの中で、「できた」「こうすればいいんだ」という気づきや成功体験を重ね、それを生かしながら自分たちがやりたいことに向けて、考えたり、試したり、工夫したりすることが大切です。このような経験を通じて、感じる心や何かを思う気持ち、粘り強く取り組む力、挑戦する力、友達と協力する力など、学びの根っこが培われ、小学校教育へ発達と学びは、つながっていきます。

個別最適^な学びと協働的^な学びの実現に

CASE #1

芦子小学校

ICT活用による学びの充実

使い方いろいろ 広がる授業の可能性

#個別最適^な学び

日常化するICT活用

児童生徒に一人一台の学習用端末（タブレット）が行き渡った今、学校の授業や家庭学習での活用が進められています。ICTを積極的に活用することで、おだわらっ子の学びをさらに充実させ、それぞれの意欲や豊かな創造性を育み、確かな資質や能力を養うことが、目指すゴールです。

芦子小学校の矢島^{あつし}先生のクラスでも、ICTを生かした新しい手法の授業が行われています。

個別最適^な学びとの親和性

図工の時間には、自己表現力を高めるために学習用端末を活用しています。「発言が苦手な児童は書くことで、書くことが苦手な児童には短いコメントで伝えることができるため安心して学べます」と矢島先生。一人一人に合った活用ができるため、学習用端末は個別最適^な学びと親和性があります。さらには、児童の意欲を向上させる効果もあるようです。

児童からは「学習用端末を使うと楽しい」「もっと使いたい」という声が聞かれました。学習用端末を起点に、子ども主体の学習がより深化しています。



- ① 図工の授業でも学習用端末を活用。今回のテーマは「墨と水から広がる世界」。前の授業で描いた墨絵にコメントし合い、友達の作品から学ぶことがねらい。自宅からリモート参加できるのも、ICTを使った授業ならではの
- ② 学習用端末を用い、作品を各自で撮影。デジタル化した作品を画面上で友達と共有します
- ③ 芦子小学校のITリーダーも務める矢島先生

“付箋アプリ”でコメントし合う



さまざまな視点からコメントできるよう、付箋を色分け。黄色は「どのように見えるか」、ピンク色は「作品のよい点」、水色は「作品をよくするための改善点」

#協働的^な学び

協働的な学びへのICT活用も進んでいます。「付箋アプリ」を使ってクラスメートの作品にコメントしたり、逆に自分の作品にコメントをもらったりと、一つの授業で多くの交流が生まれました。

児童からは「コメントがたくさんくるとうれしい」「友達の手元でじっくり見られていい」という声も。「理科の観察結果のグループ発表でも活用しました」と矢島先生。協働学習のさらなる深まりも目指しています。

ICT支援員

ICTを活用した授業などを教員がスムーズに行うためサポートする「ICT支援員」。谷田さんは芦子小学校を含む市内の計3校で支援員として活動しています。「学習用端末でこんなことはできますか？」と相談すると、実際の授業で具現化していただきます。支援員さんがいてよかったです」と先生たちからも信頼されています。



ICT支援員
やっだ 谷田美奈子さん

向けて

これからの教育には、全ての子どもの可能性を引き出す、一人一人の個性・特性に応じながら学習を進めていく「個別最適な学び」と、異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びを生み出す「協働的な学び」の実現が必要です。市でも、その実現に向けた取り組みが行われています。

CASE #2 新玉小学校

民間施設を活用した水泳授業

一人一人に合わせた指導に加え、教員の負担軽減も

#個別最適な学び #協働的な学び



①新玉小学校から徒歩5分程の「神奈中スイミング小田原」で、同施設の指導員から個別指導を受ける児童。それぞれの泳力に応じて指導し、苦手意識があった児童からも達成感が得られたという声が多数ありました
②2つの学年を合わせた約50人の児童が、1つの授業に参加。児童からは「プールの水がとてもきれいで快適」「温水シャワーがよかった」など環境面のメリットの他、「来年もぜひ!」という前向きな意見が数多く寄せられました

少人数グループでの丁寧な指導

小・中学校における水泳授業を民間施設で行うケースが全国的に増える中、本市においても民間施設での水泳授業を新玉小学校で試験的に実施しました。

「本校での水泳指導は対応できる教員数の関係から、3グループまでが限界でしたが、今回は5グループに分かれ水泳指導のプロから教えてもらえ、非常によかったです」と岩田真由美校長。「神奈中スイミング小田原」の鬼澤智弘副支配人は、「学校では、児童それぞれの状況を丁寧に把握しながらの授業展開は難しかったと聞いていたため、一歩踏み込んだ指導を心掛けました」と語ります。

教員の負担減 児童と接する時間増

通常、教員は水泳授業の指導に加え、清掃・水質管理・機械操作といったプールの管理にも多くの時間を割いています。岩田校長は、「教員がこれまで行っていたプール管理の負担が減った分、児童と向き合う時間が増えたことが教育上の大きな利点」と言います。

今後は、教育委員会が効果検証を行い、水泳授業や学校プールの在り方について検討していきます。

CASE #3 教育委員会

「ステップアップ調査」を実施

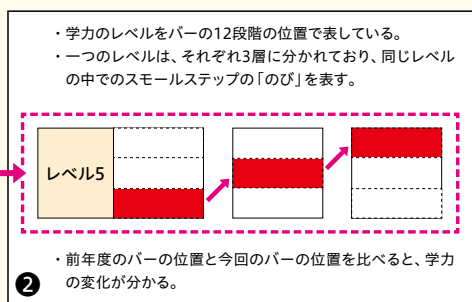
児童生徒一人一人の「のび」に着目

#個別最適な学び

児童生徒一人一人の学力の「のび」を把握するとともに、非認知能力※や学習に対する姿勢を見るのが「ステップアップ調査」です。小学4年生以上の児童生徒が毎年取り組み、その結果を個別指導や授業の改善、よりよい学級づくりに役立てます。

令和5年度までは泉と酒匂の2つの中学校区で試験的に実施し、効果検証を行い、市内全校へ展開していく予定です。

※自制心・自己効力・自己肯定力・勤勉性・やり抜く力など



①子どもたち一人一人に配付される「個人票」。個人票には前年度と比較した学力の「のび」が記載されており、どれだけ「のび」たかを把握することができます。また、学習に関するアドバイスも得られます
②同じレベルの中でのスモールステップの「のび」を示すことで、細かい分析ができます

幼児教育・保育の質の向上

公立や私立の幼稚園・保育園などがそれぞれの特色を生かし、子どもがさまざまなことに直接関わり、頭も体も動かし、主体性や創造性などを育む、質の高い幼児教育・保育の提供を目指します。

CASE #1 私立幼稚園



【こゆるぎ幼稚園】子どもたち一人一人の発達や特性に配慮しながら、さまざまな遊びを取り入れています

幼児期だからこそできる経験を

心身の健やかな成長に重要な「遊び」

子どもたちにとって「遊び」とは、心身の健やかな成長に欠かせない大切なものです。それぞれの発達や特性に配慮しながら、各園ではさまざまな遊びを取り入れています。遊びの中で子どもたちの脳や身体はさらに成長し、創造性や柔軟性が育まれ、子どもたちはのびのびと自発性を身につけると同時に社会性を学びます。

子どもたちが試行錯誤しながら多くのことに日々挑戦し、そのプロセスが認められることの重要性をとて大切にしています。幼児教育における理念を基に、各園では、これらを意識し日々の活動を行っていくことを目指しています。

CASE #2 私立保育園



【小田原乳児園・小田原愛児園】給食のフードロスを防ぐボールコンポストに。その堆肥で育てた野菜を食育活動のめかげに



未来を育む「こどもまんなか」の保育

「子ども主体の保育」は保育士の主体性から

子どもが大人になったときのイメージを思い描きながら、持続可能な社会へ向けた「最初の一步」となるような生活習慣や実践を経験できるよう取り組んでいます。自分らしくたくましく未来を生き抜く子どもたちを育むために、保育士が主体性を持ち、職員同士が支え合い、学び高められるような組織づくりを進めています。

子どもの成長の喜びを保護者と分かち合うこと、地域の皆さんと対話し未来を育んでいくこと、全てが「保育の質」を豊かにする大切な源です。子どもを「まんなか」に家庭・地域・園が手をつなげるコミュニティづくりを一步一步進めていきたいです。

CASE #3 公立幼稚園・保育園



【東富水幼稚園】川の流れ、河原の石、魚。豊かな小田原の自然の中で、心を動かされるものと出会い、さまざまなことを学んでいきます

小学校からその先も見据えて

さまざまな人やものと「関わる力」を育む

散歩中に出会う花や虫、潮のにおいや波の音、川で泳ぐ魚といった豊かな小田原の自然。声を掛けてくれたり、畑の栽培を手伝ってくれたりする地域の皆さん。公立幼稚園・保育園では、自然や人々と関わりながら、子ども自らが出発点となる遊びや、子どもがわくわくする体験を大切にしています。

さまざまな体験の中で、「楽しい!」と感じ、「もっと楽しくしよう!」と夢中になって物事に関わることで、あきらめずに頑張ったり、友達と協力したり、もっと難しいことに挑戦したりする力を育みます。この力は、学びに向かう力となり、子どもが担う新しい社会に対応する大切な力になります。

自治体の子育て支援などを研究する先生に伺いました!

遊びや自然体験が非認知能力を育む



玉川大学
教育学部
乳幼児発達学科
おおまめうだひろとも
大豆生田啓友 教授

就学前教育は今、子どもを主体とする質の高い教育・保育を全ての子どもに保証すること、そのための投資や人材育成を行うことがさらに求められています。ですから、市が総合計画の重点施策として「幼児教育・保育の質の向上」を掲げ、取り組んでいることは先進的といえます。

遊びや自然体験などを通して非認知能力を育むことは、子ども自身の幸せはもちろん、子どもが将来担う社会経済活動にもつながります。自然に恵まれた小田原ならではの環境のもと、子どもたちには豊かな体験を積み重ねてもらいたいです。そうした経験が、学校教育まで継続して得られると理想的ですね。